

『舞踊部』

理事 黒田 博子

この度は流山市文化協会創立50周年、おめでとうございます。

舞踊部が産声を上げましたのは昭和47年（1972）のことでした。文化協会よりお誘いをいただき、昭和49年（1974）に入会し、あっという間の半世紀でした。初代部長は吉田忠男先生「芸名：花柳寿々忠之」、二代目は矢澤先生「芸名：矢澤錦亀千」、三代目は富岡菊江先生「芸名：藤海幸菊洲」、四代目は中新田こと先生「芸名：新成華扇」、現在は五代目として、私こと黒田博子「芸名：藤海菊映洲」が引き継いでおります。



私達の主な年中行事は、毎年春の舞踊発表会、6月に県民プラザで行われる6市合同の東葛飾文化祭および11月の流山市文化祭の舞踊発表会です。また、各地で開催する盆踊り、敬老会、施設訪問などのボランティア活動があります。更に、5年に一度は本衣装、本化粧、カツラ等をつけての舞踊発表会を開催しております。平成29年（2017）には舞踊部創立45周年記念舞踊発表会を開催しました。その時の写真です。

今後も流山市の文化芸術がますます発展していきますよう、皆様のお力をおかりしながら頑張っていきたいと思います。



元禄花見踊（邦楽三曲部とコラボレーション）



華舞台



流山市文化協会舞踊部四十五周年記念舞踊発表会 H29.6.11 流山市文化会館

舞踊部の先生方です

『コーラス部』

理事 宇田川 吾郎

流山市文化協会が50周年を迎えたこと、お祝い申し上げます。
この半世紀に渡り、流山市の文化発展にご尽力をされてこられた皆様
に、心から感謝いたします。



1970年の文化協会発足を契機に合唱活動が盛んになり、1985年に文化協会コーラス部として独立（13団体）、1996年には流山市合唱連盟としての改組が行われ、現在は16団体が加盟しています。各団体にて活動に励む中、流山市文化祭での公演（流山市合唱祭）やアンサンブル交歓会などを通じて技術向上を求め、相互の交流を深めてきました。また、折々での講習会の開催、合唱連盟としての記念演奏会や連盟歌の委託などの活動により、一層の研鑽を積み重ねています。

2007年と2017年に、流山市制40周年と50周年を記念した「第九演奏会」を開催致しました。流山市音楽家協会様、流山フィルハーモニー交響楽団様と協力し、市からも助力をいただきながら、いずれもご好評をいただきました。皆様に心から感謝申し上げます。また、各周年を祝いながら流山市の文化発展に寄与できました事を光栄に思います。

この筆をとっている2020年の夏は新型コロナウイルス感染症が流行しています。文化協会の各部に於いても大きな影響を受けている事でしょう。コーラスは特にリスクが高い部として見られ、思うような活動ができない状況となっています。それでも、自宅での練習、インターネットの活用や歌唱用マスクの利用など、様々な工夫を加えながら、再びの活動に向けて力を蓄えています。そして、コロナ禍が収束して活動再開となればこの蓄えは必ず実を結ぶものと期待しています。

合唱、コーラスは、紐解けば千年以上続いた文化です。声を出し、歌い合わせる喜びは人の魂と結びついて考えられてきました。この文化を引き継ぎ、育て、次世代へとリレーしていくことは容易ではありませんが、力を合わせて邁進してまいります。今後共変わらぬご指導とご鞭撻をよろしくお願ひ致します。



市制40周年記念演奏会「第九」



流山市合唱連盟20周年記念演奏会

（合唱とアリアでつづる今日だけオペラin流山）

『民謡部』

理事 浜田 玉緒

私たちの祖先はどこの国よりも唄うことの好きな国民の様です。嬉しいにつけ、悲しいにつけ、その都度、その土地の言葉で唄っていたのです。そして、民謡という情緒的な分野をはっきりと見出して唄われだしたのは江戸時代になってからです。



芸術には理解し難いものもありますが、民謡にはそれがあります。誰でも、無意識にこの世界に入り込めて好きになり、気楽に習得が出来て、その情緒に誘われると、唄う人と聴く人との垣根がなくなり、聴き手が唄い手になることです。個々の型はあっても、人により、場所により、情緒的な表現は自由です。皆で楽しく唄い、手拍子を打ち、掛け声をかけあう、これが民謡のすばらしさです。

現在は流山市民謡連合会としては毎年、春、秋の2回、流山市文化会館ホールで発表会を行っております。練習の成果を楽しく発表しています。



練習風景

「浜田理事は玉川勝太郎一門として「玉川こう福」の芸名で、毎月、浅草木馬亭に、浪曲で出演しています」



流山市民謡連合会玉緒会支部 発表会

『邦楽三曲部』

理事 牧野 良三

私達の「流山市邦楽三曲会」は昭和52年（1977）の「広報ながれやま」11月1日号の会員募集から始まっています。「世代や流派の垣根を越え、共に演奏できる場をつくりたい」この呼びかけで、市内在住の箏、尺八三弦の職格者21名が集まり、昭和53年2月（1978）に誕生しました。流山市文化協会には同年5月に加盟し、現在に至っております。

邦楽を愛する多くの市民に支えられ、私達の活動があります。



◎春、秋の演奏会

私達の主な活動は、毎年恒例の「春、秋の定期演奏会」を軸に、国民文化祭、東葛飾文化祭、各種施設でのボランティア演奏があります。秋の流山市文化祭演奏会では会員社中のお弟子さんを交え70名を超える大演奏を行い、注目していただいております。

◎市内16カ所の小学校で邦楽鑑賞教室

昭和63年（1988）から始めた「小学校邦楽鑑賞教室」は平成10年（1998）の邦楽教育の義務化に先駆け取り組んできました。お陰様で、現在は市内16校で小学生一人一人が日本の伝統楽器（箏、尺八）に触れ、演奏体験する実践的な鑑賞学習を行っています。子供達の眼の輝きと感動は日頃の苦労を忘れさせてくれる一時です。

◎一茶双樹記念館にて年3回の邦楽コンサート

平成10年（1998）より一茶双樹記念館にて、春、夏、秋の年3回の「邦楽コンサート」も実施しています。市民の皆様と身近なふれあいを大事にしながら、邦楽の理解と普及に努めています。和楽器の奥深い音色をこよなく愛し、その表現の可能性を一人でも多くの方々に伝えたいとの思いが、私達を支えているかもしれません。



邦楽コンサート
(一茶双樹記念館)



『詩吟部』

1 詩吟の歴史

理事 川瀬 紘文

漢字が中国から伝わり、奈良・平安時代には貴族の間で漢詩や和歌が盛んになりました。その頃から漢詩に節をつけて詠んでいたと考えられています。その後、武将や僧侶にも漢詩や和歌を作る文化が広がりましたが、まだ、教養の一部とみなされる程度でした。江戸時代に入り、幕府は儒教を採用します。その結果、全国的に漢詩が勉強されるようになり、漢詩を朗詠する者が増えてきて、これが現代の詩吟の元となっています。昭和になると詩吟は大衆化し、漢詩、和歌、俳句、現代詩等に広がり、現在は伝統芸道として国民芸術まで高められるよう取り組まれています。

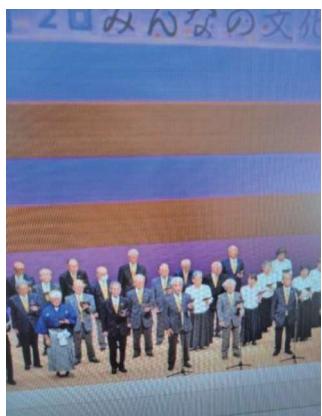


2 詩吟部の現状

詩吟部は昭和55年（1980）に文化協会の会員になりました。現在の部内の団体名を略称して紹介します。流山吟詠会、光祥流吟詠会、韻の会、千葉北吟詠会、精和会、神松会、有明会、生涯大学校詩吟クラブの8団体で合計人数113名です。年間活動は流山市文化祭に参加し、夏季吟詠大会を隔年開催しています。その他、各団体は研修会、定期勉強会、昇段審査会、全国大会、研修旅行、コンクールを開催し、江戸川台福祉会館まつり、東部公民館文化祭、東葛飾文化祭、初石公民館まつり等にも参加しています。日常の活動ではいろいろな場所で教室を開いております。

3 詩吟の魅力

詩吟は詩の語尾に独特の節をつけて詠います。腹の底から声を出すことが魅力です。人によって声の大きさは違いますが、自分の一番大きな声で詠います。声を出すことにより頭の中は空っぽになります。日頃抱えているストレスや悩み事は一瞬に消えてしまいます。大声を出すと腹式呼吸をするようになり、血流は良くなり、固まっていた筋肉がほぐれてきて、健康の元となります。教室の雰囲気は「楽しくなければ詩吟でない」の合言葉で和気あいあいです。誰もが入会し易い仲良し教室で楽しくなります。詩吟は文学や歴史を知り、精神修養にもなることが大きな魅力となっています。



第2回 みんなの文化

『洋舞部』

理事 野澤 夏奈

洋舞を通してより多くの人が芸術や文化を感じ、ふれあう機会を増やすために市内をはじめ、様々な地域で活動しています。



私達の共通点は、バレエが大好きな事、そして、幼い頃からこの流山でバレエを始め、流山市での文化芸術の発展に役立ち、バレエを広めたいと思っている志です。市内の行事はもちろん、東葛地域行事、千葉県行事、更には国民文化祭への参加や海外公演の参加、ボランティア施設訪問や様々な文化芸術に触れるワークショップの開催を通して、後輩の育成にも力を入れ、流山市でのバレエの基盤を作っていました。これからはその基盤をどんどん繋げ、広げて野澤夏奈部長の未来の展望を果たしてください。

流山市でバレエ公演のできる環境を作りましょう！ 文化協会 会長 上野真由美

私は、流山市で育ち流山でクラシックバレエを始め、幼少時より流山市文化祭等に出演してきました。先行きが不安な世の中になっていますが、今こそ文化を通して心の拠り所、心の豊かさ、そして子供たちに未来への希望が必要だと思っています。ダンサーとして、文化庁の文化芸術事業等で様々な地域で公演に参加し、経験してきた事を活かし、自分の教えている地域の子供達、洋舞部所属団体の皆様と共に、そして文化協会の多くの先輩方にご教示を頂き、自分の生まれ育った流山の文化に少しでも貢献していくたいと考えています。

(公財) 井上バレエ団 野澤夏奈



ジャパンウィーク2019アテネ 孤児院にて



国民文化祭にいがた2019



千葉県文化芸術フォーラム2019



2019年「眠りの森の美女」より

『歌謡部』

理事 根本 三夫

流山市文化協会創立50周年誠におめでとうございます。半世紀に渡り流山市の文化を牽引してこられた歴代の会長さんや役員さんに深く敬意を表したいと思います。本年度は世界中がコロナで騒然としていて、感染症対策、経済活動や文化活動の自粛など色々な試練の中、50周年祝賀会の準備を整えて下さった役員さんに感謝を申し上げます。



私ども歌謡部は昭和62年（1987）に文化協会に加入し、歌謡部からは内先生、有田先生、高峰先生と3名の方々が本部役員に任命されて、他の役員の皆様と共に流山市の文化の貢献に努めてまいりました。現在の歌謡部は11の所属団体があり、部員数は500名を数え、各教室で歌謡曲を勉強し、各大会に出場したりして、楽しんでおります。歌謡部の活動は年3回の統一発表会と各団体の発表会は合計すると年12,3回あり、文化会館、生涯学習センター、初石公民館、県民プラザで開催しております。大きな舞台に立ち、たくさんの人の前で歌う緊張感が心身をリフレッシュさせ、口を大きく開けて発声する事は喉を鍛え、誤嚥を防ぎます。深いプレス（息継ぎ）は肺を横隔膜を内臓筋肉を鍛えます。これら全てが健康寿命を延ばすことに繋がると病院の諸先生方が言っておられます。

戦後75年、昭和、平成、令和と平和な時代が続き、国民栄誉賞を受賞した歌手や作曲家も出て、社会に大きな影響を与えてきました。カラオケという便利な機械が出来て歌は身近に気楽に歌うことができます。世界中に「KARAOKE」という共通語が生まれ、多くの人々が歌を楽しんでおります。私達、歌謡部は先生方を始めとし、流山市内はもちろんのこと、近隣都市との交流を深め、歌謡文化をより広く発展させるために努力しております。流山市教育委員会、文化協会、諸先生方の文化活動に改めて敬意を表します。



『伝統芸能部』

理事 中村 智

伝統芸能部は平成27年（2015）に文化協会に入会しました。この年の第61回流山市文化祭伝統芸能部の発表では、唯一の所属団体であるおおたかの森お囃子会が半日、祭り囃子や獅子舞、ひよっこ踊りを披露しました。



平成28年（2016）には、万作踊り流山支部、島根県伝統芸能安来節大利根支部流山部会、流山三線同好会ちばんちゅ、芳泉会、太平洋ふぐの会、流山落語同好会の6団体が加入し、この年の第62回文化祭では7団体が発表しました。更に、オープニングセレモニーではお迎え囃子を演奏し、アトラクションでは万作踊り流山支部、芳泉会、おおたかの森お囃子会が出演しました。その後、毎年の文化祭ではお迎え囃子を演奏し、アトラクションにも出演しています。

平成29年（2017）には越中おわら同好会が加入し、平成29年の第63回、平成30年の第64回文化祭では8団体が発表しました。

平成31年（2019）は流山西馬音内会が加入し、この年の第65回文化祭では9団体が発表しました。

令和2年（2020）に太平洋ふぐの会と越中おわら同好会が退会し、現在の伝統芸能部は①おおたかの森お囃子会②万作踊り流山支部③島根県伝統芸能安来節大利根支部流山部会④流山三線同好会ちばんちゅ⑤芳泉会⑥流山落語同好会⑦流山西馬音内会の7団体で構成されております。



『謡曲部』

理事 山口 晴義

能は650年前、世阿弥によって完成され日本各地の能楽堂で演じられています。能を構成する主な要素は謡、舞、囃子等で、その内の謡の部分を取り出し、素謡文化として現在まで継承されています。謡は約210曲、シテ、ワキ、地謡等のお役に分けて謡います。また、神（高砂、鶴、亀等）、男（屋島、田村等）、女（羽衣、松風等）、凶（葵上、隅田川等）、鬼（船弁慶、猩々等）に分類され、それぞれの趣をもって謡います。



日本の伝統芸能「能」を構成する謡のすばらしさについて謡曲10徳をご紹介します。

- 1・現代病と云われる鬱気をはらし、ストレスを解消する
- 2・肺機能を高め、咽喉を強める
- 3・食欲が増進し、胃腸の働きを活発にする
- 4・集中力を養い、脳の働きを増進する（老化防止）
- 5・自ずから礼節を身につけ、良識を得る
- 6・文学、歴史を学び、知識と新しき発想を得る
- 7・孤独を慰め、広く知己を得る
- 8・美しき日本語に接し、発音は正確、美声となる
- 9・芸術の深さを識り、感性に富んだ美を追求し表現する
- 10・現実の世界を離れ、中世（室町時代）の演歌と云われる謡曲を吟じる



謡曲発表会

現在、流山市内では、百謡会、栄謡会、研謡会などが謡の会を開催し、毎月、会員同士で切磋琢磨しています。春には謡曲と仕舞の大会を開催し、秋には流山市文化祭で日頃の成果を発表しています。また、春秋の大会には東葛飾各市の謡曲の会をご招待し、各市との友好を図っています。

能楽は日本文化の象徴として、2001年5月にユネスコから「人類の口承及び無形遺産の傑作」として「世界無形遺産」に指定されました。之は日本人には大変な誇りです。今は世界的な視野に於いて能楽の保存と継承はより一層大切になっております。

謡曲部は能楽の普及活動の一環として、千葉県の「ふれあい体験事業（能楽）」に参加し、小中学生の教育現場での能楽体験教室に協力しています。



体験教室



体験教室

『盆栽部』

理事 井上 憲夫

流山市に盆栽部が組織されたのは、昭和30年（1955）に流山町に文化団体協議会の設立と同時に、盆栽愛好者が草樹会を結成し、同協議会に入会したのが始まりです。昭和45年（1970）に流山市文化協会が創立され、草樹会会長として谷口寿郎氏が同協会に参画し、盆栽部が誕生しました。その後、昭和47年（1972）には日本盆栽協会の第66番目の支部として、日本盆栽協会流山支部が設立されました。



現在の会員数は30名前後で、お互いに意見交換をしながら切磋琢磨し、和気あいあいに盆栽を楽しんでおります。本年度は新型コロナウイルスの影響で、思うような活動が成されておりません。昨年までの活動状況は下記の通りです。

記

- 5月 流山愛草会と合同の展示会（初石公民館）
- 6月 東葛飾文化祭盆栽展（県民プラザ）
- 9月 盆栽および水石の展示会（生涯学習センター）
- 9月 盆栽技術講習会
- 10月 流山市文化祭盆栽展（文化会館ホワイエ）

今後は、秋の秋季盆栽視察旅行を通じて、専門家のお棚等を拝見し、視野を広げ、若い人や女性が関心を持てるような活動ができればと思っております。



平成30年9月
盆栽技術講習会



令和元年 東金園にて



平成29年 昭和記念公園・盆栽苑

『華道部』

理事 伊藤 和子

流山市文化協会50周年、おめでとうございます。華道部も文化協会発足と同時に歩み始めましたので、同じく50周年を迎えます。感慨無量です。この間、部活動も種々変化してまいりました。春、秋の研修会では、いろいろな花を求めることがほとんどでしたが、時には、陶芸や各種博物館を見学し、見聞をひろめてまいりました。各公民館では積極的に講座を開講し、大勢の皆さんに花のある生活を後押しさせていただきました。市の文化祭では、華道部を東西南北の四つのブロックに分け、人数を絞っての出瓶となりました。その後、四つのブロックはそれぞれが華展を開催するようになり、花供養も行われ、会員各位の熱意を感じました。



平成元年（1989）には市民ギャラリー展「四季の花々展」が発足し、市役所ロビーにて奇数月に生け込みを行い、「市役所ロビー展」として親しまれています。また、海外にも足を運び、韓国の華道教室の皆さんと交流ができたことは、本当に嬉しいことでした。更に、平成3年（1991）には、華道部の20周年の祝賀会と記念誌の発行が行われ、平成13年（2001）の30周年会報では、今後の活躍を誓いました。

流山トーテムポール国際大会では、外国の皆様にも花鉢を持って、生け花の体験をしていただき、国際交流の場を持てた事は大変うれしいことでした。その他に、「流山まなびフェスタ」や「敬老花のプレゼント」および市の「各種イベント」には式典花等精力的に活動して早や、50周年となりました。その後、会員の減少や高齢化も加わり、少數精銳のメンバーとなりましたが、和気あいあいの中で、生け花の情熱を保ちつつ、楽しく日々の活動を続けております。

これまでの諸先輩の弛まぬご努力に感謝を申し上げますと共に、関係諸機関の皆様にも心より敬意を表したく存じます。様々な理由で環境の危機が叫ばれている昨今です。日本独特の文化である華道をより深く理解し、人間性豊かな心の糧として、広く親しんでいただけますよう、これからも精進してまいります。今後とも、関係各位にはご指導とご協力を賜りますよう、よろしくお願ひ申し上げます。



華道部の皆さん



文化祭（生涯学習センター）



北部公民館にて

『手芸部』

理事 大塚 弘子

流山市文化協会創立五十周年、おめでとうございます。
半世紀を迎えた協会に対し、これまでの運営にご尽力をいただき
ました諸先輩の方々に敬意と感謝を申し上げます。

現在、手芸部は五代目会長、大塚弘子を中心に二十三名の会員で活動しております。一年間の事業計画は、春は「きらら会」の名称で社のアトリエ黎明で行っています。その際、会員の手作りの品でバザーを催し、売り上げの一部を流山市福祉協議会に寄付させていただき、ご来場のお客様に会員の手作りの粗品を提供したりして、皆様から喜びの声をお聞きしております。また、毎年六月に、さわやか県民プラザで開催される「東葛飾文化祭」に出品したり、流山市役所ロビーに一ヶ月間、作品を展示したりしています。秋の流山市文化祭には会員一同、心を込めて作品を制作し、展示しています。多くの皆様にご覧いただくことは、私達の明日への活力となっております。

特筆されることは、会員の一人として、毎年、アメリカで開催される「万華鏡世界大会」で五回、最優秀賞を授賞された万華鏡作家・中里保子氏がおられます。万華鏡は子供の頃、筒の中をのぞいて、その瞬間の輝きに夢中となり、歓声を上げた懐かしい思い出があります。近年、この万華鏡は、その内に秘めた煌きが一瞬に現れ、一瞬に消えてゆく、それは無限にとどまることのない美を競う芸術作品として、その外観はアート作品として、世界で高く評価されています。現在、中里氏は市内外で精力的に活動されており、増えのご活躍が期待されております。

これからも流山市文化協会のご発展をお祈り申し上げます。



文化祭



万華鏡・中里保子作

『写真部』

理事 清水 賢介

昭和30年（1955）に流山町文化団体協議会が発足し、第1回の文化祭に写真部として作品を展示しました。これが文化団体として写真部の活動した始まりと云われています。

カメラは一瞬にして情景を取り取り映像化してしまう機能を持ち、眼にしたもののが眞実を記録し、多くの人に感動を伝えるハイテクな機械です。撮影者の優れた感性によって良い作品は生まれますが、写真技量の向上には、より多くの人の眼に触れる発表を行い、仲間同士で研鑽し合う事が肝要です。

現在は部員18名で、下記の5項目の事業計画を定着させ充実した活動を行っています。

- i) 春季、夏季、秋季、冬季で4回以上、日帰り又は1泊旅行の撮影会を実施しています。
- ii) 毎月の月例会を主に初石公民館で第2日曜日の午前中に開催し、各自の日常の写真活動のコンテストを行い、お互いに情報交換や作品の評価をして技術を磨いております。
- iii) 每年「さわやか県民プラザ」で開催される東葛飾文化祭に参加し、柏市、野田市等の写真団体と協調して作品を展示しています。
- iv) 流山市役所市民ギャラリー、初石公民館ロビー、老人ホームで毎年1回、1ヶ月間に及ぶ作品展を開催しています。
- v) 流山市文化祭に実行委員として参画し、各自の代表作品を出展すると共に円滑な運営を心掛けながら文化祭の向上に努めています。



房総撮影会



富士山撮影会

『書道部』

理事 坂本 英雄

昭和45年（1970）に文化協会の発足当初から太田政一氏を中心に市内の書道同好会の仲間25名が集まり、流山市書道連合会として始まりました。その後、昭和59年（1984）に流山市書人協会と改めて成田竹情先生を会長として新しい体制となりました。本会は「書芸術の高揚を以って相互理解を深め、秩序ある会の進展と書道文化の興隆を図る」ことを目的として現在まで活動しています。主な活動は



1月：市民ギャラリー展（市役所ロビー）、3月：流山市書道展（生涯学習センター）

6月：流山市会員展（生涯学習センター）、6月：東葛飾文化祭（県民プラザ）

11月：流山市文化祭（生涯学習センター）

特に、春の書道展は公募も含め子供から大人まで、毛筆、硬筆の作品を展示して、優秀な作品には市長賞など各賞の授賞式を行っております。

日本の書は飛鳥時代から1,500年以上も続いている大切な伝統文化です。そして文字には言葉を伝える表記としての役割と線の芸術である「書」としての二面性があります。造形性を強調すると「文字として読みづらい」ことになりますが、最近では「読める書」として調和体の作品が漢字や仮名とともに多くなってきています。時代とともに「変わること」、「守り続けること」を大切にして、歩みをともにする協会にしたいと考えています。これからも皆様に楽しんで頂ける展覧会を目指して、書道部全員の力を合わせて活動していきたいと思います。

「流山市書人協会の役員」（2020年3月現在）

顧問 田村紅華 佐々秋露 白石増子 安野映竹

会長 坂本英山

副会長 若井畦翠

事務局長 近藤美浦

会計 黒山桂芳 深海昌子

常任理事 山崎佳月 白木景葉 伊藤映紅 宮本翠竹 田中静圭 小澤孤舟

他に、理事18名、同人51名、会員41名



2020年3月・書道展

『囲碁部』

前理事 小手 辰男



囲碁は600~700年頃、中国より伝わり、宮廷や僧侶など知識人の間で音楽と共に盛んになりました。戦国時代の武将は囲碁の嗜みを常とし、家康の囲碁好きは有名です。そのため、江戸時代になると囲碁は家元制度もとで手厚く保護されました。漸く、明治の中頃から、一般庶民の娯楽として広まり、現在は世界10数ヶ国で楽しめています。

囲碁は白石と黒石を使って、361ヶのマス目がある碁盤上で「互いの石でせめぎあい、獲得したマス目の数の多さで勝敗を競う」ごく単純なゲームです。しかし、勝利するためのテクニックは奥が深く、その技を知れば知るほど、その神妙さに引き込まれます。この魅力は老若男女を問わず、まるで未知の世界に足を踏み入れたような錯覚を覚え、時が経つのを忘れるほどです。明治の俳人、正岡子規は次のような句を残しています。

「短夜は碁盤の足に白みけり」

流山市囲碁同好会は昭和44年（1969）、文化会館の開館と同時に20数名で創立されました。現在、4地区（東、南、中部、北）にある囲碁サークルは30カ所ほどで、推定囲碁人口は400名弱になります。各サークルでは独自の勉強会、大会等を開き、交友を兼ねて囲碁を楽しんでおり、市全体としては年6回、囲碁大会を開催しています。特に、初石地区を中心とした「日本棋院流山支部」はプロ棋士を招いての囲碁講座や子供囲碁教室を開設し、文化協会囲碁部も又、勉強会や子供女性初心者教室など囲碁愛好者の育成に力を注いでいます。2017年にホームページを開設し、市内外の囲碁を趣味としている人達が、各地区の囲碁サークルへ、囲碁大会へ気軽に、容易に参加できるようにしました。

今後の流山囲碁界は囲碁人口の減少に多少の懸念はありますが、各地区の活力のある人達のご協力もあり、より楽しく、より生きがいのある囲碁同好会になればと願っています。

<http://www.nagareyamaigo.com>



日本棋院流山支部勉強会（コミュニティプラザ）



夏季囲碁大会（2019年・文化会館）

『将棋部』

理事 佐藤 嘉博

昭和45年（1970）、流山市文化協会の設立と同時に、部員20名で発足し入会しました。現在、「将棋流東友の会」「流山王将会」「日本将棋連盟流山支部」他、幾つかの同好会があり、それぞれに将棋の普及と棋力の向上を目指し、活動しています。



将棋はインドで生まれ日本で育った文化遺産であり、戦国時代から庶民に親しまれ、愛され続けてきました。将棋には40枚、8種類の駒があります。この駒を盤上で、自分の思い通りに、自由自在に動かし、勝ち負けを決める楽しいゲームです。昭和の天才棋士、故升田九段が名人位の頂点に立った時、「たどり来ていまだ山麓」とその心境を語りました。このように将棋の目指すところは、真に奥の深い、知力の棋道と云われます。そこからは先見性、大局観、決断力、礼節等が涵養されます。平成26年（2014）に「流山王将会」は「流山子供将棋育成会」をつくり、将棋を通じて子供達に、思いやり、挨拶、ルールを守る大切さを教え、子供達の健全な育成に努力しています。毎年、「流山市小学生将棋大会」を開催し、150~160名の参加があり、嬉しい悲鳴となっています。

趣味や娯楽の多様化、会員の高齢化などにより、会員の減少がみられます。これに歯止めをかけ、少しでも会員を増やすことが当面の課題です。そのためには「この会に入ってよかった」と喜ばれる会、明るく見通しの良い会になるように、会の運営を心がけています。これからは、町会、老人会、地域の他の団体や友人、知人に積極的に働きかけ、勧誘に努めてゆきたいと思います。本誌を読まれている皆様、身近に将棋に関心を持っている方がおりましたなら、ご推薦をお願いします。



将棋流東友の会（日本将棋連盟流山支部）



流山市小学生将棋大会（文化会館）

『俳句部』

理事 北川 昭久

流山市文化協会が昭和45年（1970）に設立されると同時に、当俳句部も参加してきました。俳句を通じて流山市の文化、芸術の発展に、向上に寄与できたことを、ともに喜びたいと思います。

現在、流山俳句協会は10句会、120名の会員により着実な歩みを続けています。本年度も、3つの重点事項を踏まえ、流山市の俳句の輪を拡げたいと念じています。

1・俳句同好者の育成と交流

俳句界の高齢化も大きな問題ですが、交流の場をさらに具体的に広げたいと思います。年2回の俳句会（初夏の俳句会、流山市文化祭参加の俳句会）や俳句作品展（市民ギャラリー、東葛飾文化祭などに展示）の実施および合同句集「味酔の里」の発刊です。

2・少年少女俳句大会の継続的な開催

第18回を迎えた本年度少年少女俳句大会は市内全小中学校、25校から5,000余名の児童、生徒により約10,000句の投句があり（地域主催では日本一の俳句大会）、市教育委員会と連絡を密に、着実に実施を進めたいと念じています。

3・流山の俳句の伝統を維持

流山の俳句風土にとって、一茶双樹記念館は貴重な文化的史跡であり、大切な拠点です。一茶双樹まつりの俳句交流大会への参画、俳句教室の継続的な実施等、連携を密にしていきます。さらに、姉妹都市である長野県信濃町との交流や柏市、野田市等の近隣都市との交流を含めて、地元に根付いた俳句活動を続けてゆく所存です。



流山市少年少女俳句大会の表彰式



俳句部会員短冊展



小学校へ出張教室

『茶道部』

流山市茶道親和会 理事長 谷田貝 宗雅

昭和、平成、令和と時代が移り変わり、流山市文化協会の50周年を迎えたことに深く感銘を覚えます。平素より、茶道文化の活動につきましてはご高配を賜り厚く感謝を申し上げます。

顧みますれば、平成3年（1991）当時の流山市親和会は主たる活動拠点がなく不自由さを忍んでおりました。隣接の松戸市は松雲亭本土寺に、柏市は柏泉亭に、いずれも200名が使用可能な会場を持っておりました。親和会と致しましては、双樹亭を拡張していただくことを願い、流山市文化協会を通じて流山市に親和会の要望書を提出しました。その結果、翌年に一茶庵が創設され、以来、一茶双樹記念館は親和会の活動拠点となり今日に至っております。そして、流山市文化祭では市民の皆様に一人でも多く参加していただけるようにと、初石公民館を利用させていただいております。

新和会も令和4年（2022）に50周年を迎ますが、今後も流山市の文化発展のために「一燈照一隅」の精神で会員一同一致協力して、流山市文化協会と共に歩んで参りたいと思います。

令和2年7月吉日



理事 濱出 都志子

流山市文化協会創立50周年、おめでとうございます。之もひとえに会長ならびに役員の方々のご努力の賜物と感謝申し上げます。

文化協会とともに歩んでまいりました茶道部も50周年を迎ることとなり、50周年記念茶会を計画しておりましたが、コロナ禍の中、延期せざるを得なくなりました。

会員一同一丸となり、流山の文化継承の一助になりますよう、50周年茶会に向け邁進してまいりたいと思います。

末筆ではございますが、流山市文化協会の益々のご発展をお祈り申し上げます。



初石公民館での茶道講座



一茶双樹記念館での茶道講座

『映像部』

理事 関口 守俊

映像部は平成9年(1997)に加盟しました。映像部はビデオ(動画)制作を趣味とする人たちの集まりです。制作する内容は、旅行を撮る「紀行」、民俗行事を始めとする諸行事を撮る「記録」、季節の彩りや神社仏閣を撮って音楽だけで纏める「抽象」、「ドキュメンタリー風」など様々です。会員自身が興味を持ったテーマで作ります。作品は、撮影し、構成を考えて、資料から集め得たナレーション、必要に応じて追加撮影、音楽・効果音の選定などの編集作業を経て完成します。



映像部を構成するのは「流山映像写楽」の1団体のみです。流山映像写楽は昭和56年(1981)1月に設立し、その前年に開催された「第3回市民まつり」を市民の手で記録しようと市広報課からの呼びかけで集まった8ミリ映画愛好者10名によって創立されました。当時は8ミリフィルムの時代でしたので、会の名称は「流山8ミリ映画俱楽部」でした。平成元年(1989)5月には千葉テレビの『生きがいの創造ーわが町を撮る』で小会が紹介され、また、平成11年(1999)1月に「流山映像写楽」と改称します。8ミリフィルムよりもビデオで制作する会員がほとんどで、名実ともにビデオクラブに生まれ変わりました。

公開映写会(手づくり映画発表会)は昭和59年(1984)から開催しています。作品を観ていただくことは励みとなり、作品の向上につながるからです。近年は縦4m×横8mの大きなスクリーンに映写しています。毎年開催し、昨年の令和元年(2019)で36回を迎えることが出来ました。観客の皆様に感謝です。

流山映像写楽の主な活動は、原則として毎月第1土曜日午後1時からの例会になります。各自の作品を観賞し、時には批評し合いながら、撮影、編集という技術面の勉強会にもなり、それらを通じて作品の質の向上を図っています。活動の詳細などは小会のブログをご覧ください。「流山映像写楽」と検索してください。

ビデオクラブ団体のあいだでは、60代は若手、70代は中堅、80代になって漸くベテランと言われています。当会は70代が中心です。決して軽くない機材を持ち歩き、指先を使い、頭脳を駆使して作品を作っています。まさに、生涯学習を実践しているのです。



撮影会 (2016年7月航空博物館)



大型スクリーン



発表会受付(2019年)



例会風景

『煎茶道部』

理事 山川 豊子

お茶は今から4千年前以上の昔、中国で薬として飲まれておりました。日本には奈良～平安時代初期に遣唐使や留学生によって持ち込まれ、大変貴重であったために、貴族や僧侶などの上流階級の人しか飲む事が出来ませんでした。また当時のお茶は、現在私達が「日本茶」として親しんでいるものとは全く異なっていました。その後、時代と共にお茶の形状や製法が変化し、日本独自の「煎茶」が誕生したのは江戸時代になってからです。しかし、まだまだ贅沢品で一般家庭において、急須や煎茶が普及したのは、それより後の大正～昭和初期の頃です。現在はペットボトルや缶などより身近に、より手軽になり、お茶は日本人にはなくてはならない飲み物になりました。



お茶は簡単に手に入る飲み物になりましたが、急須で煎れた煎茶は格別な味わいです。一煎目では「甘味」を味わい、二煎目は「苦味」、そして三煎目は「渋味」と茶味の違いを楽しむことが出来ます。また、季節によって煎れ方を変え、さまざまな味や香りに出会うことが出来ます。八十八夜の新茶は香りがとても良く、暑い時には冷茶、風が冷たい頃になると茶葉を焙じて煎れるほうじ茶、そして年が明けると一年の無事を願う大福茶と、それぞれの季節にあった煎れ方が出来るのも魅力の一つです。

わが流派「尚古茗社流」（ショーコメイシャリュー）は流山市教育委員会より「この地に伝統文化である煎茶道を広めて欲しい」との依頼を受け、来年で40年になります。公民館を中心にお稽古に励み、流山市文化祭を始めとする各種イベントでのお茶会、流山博物館主催の子供煎茶教室、更に、季節ごとに子供や親子を対象としたワークショップを開催するなど、煎茶道の普及、発展のために活動を続けております。



お稽古・初石公民館



煎茶子供教室